春風秋雨相

江利川毅 県立大理事長

卒業式とはなむけの言葉

自分を大切に生かして

3月は卒業式の季節である。卒業は学校で学ぶべき課程を修了することであり、次のステップに進む区切りでもある。埼玉県立大学の卒業式は13日に行われた。

大学の卒業式では学長が式辞を述べる。学長の式辞で思い出すのは、大河内一男東大総長の「太ったブタになるより痩せたソクラテスになれ」という言葉である。高校1年の時に新聞で読んで、ブタになりたい人なんていないはず、と強い違和感を持ったことを覚えている。

改めて調べてみると、昭和39年3月28日の某新聞の夕刊に、〝やせたソクラテスたれ〟という見出しで、関係部分の要旨が載っていた。「むかしJ・S・ミルが『ふとったブタになるよりはやせたソクラテスになりたい』といったことがある。いまの社会のひずみから目を覆ってふとったブタの栄誉に安住するよりは、たとえ身はやせても信念に生きることが人間らしいのだ。卒業生の諸君がやせたソクラテスになる決意をしたとき、日本は本当に良い国になるでしょう」

当時は池田内閣の所得倍増計画が進められ、前年にはケネディ米大統領暗殺事件があり、この年の秋に東京オリンピックが開催された。高度経済成長のただ中のときに大河内総長は「いま卒業生にとって何より必要なことは（中略）政治や経済や文化などの面で日本的なゆがみやひずみを正すことである」（上記新聞より）と述べている。卒業生への期待だけでなく、社会に対する警鐘という意味も込めていたのかもしれない。

話題になった言葉ではあるが、大河内総長は実際にはこの部分を述べていない。『私の人間論』（大河内一男著）には要旨について次のように書かれている。「この言葉はミルがエッセイで述べたもの。総長の告辞はあらかじめ文章化しておいて、安田講堂での式が始まると同時に、各新聞社に手渡す。写真班のフラッシュやテレビカメラの強烈なライトのために、原稿を演壇で読むことができず、しゃべらずに終わってしまった。この一句は多少きざっぽく思われ出したので、告示の中で引き合いに出さないでよかったような気がしている」

なおJ・S・ミルの「功利主義論」の中に豚とソクラテスに触れている部分がある。『世界の名著38』では次のように訳されている。「満足した豚であるより、不満足な人間であるほうがよく、満足した馬鹿であるより不満足なソクラテスであるほうがよい」。

私はいわゆる東大紛争のころの学生で、卒業式を経験していない。埼玉県立大学の卒業式は県立大学で学んだこと、新たな職場で先輩、同僚、他職種の人たちと働くこと、患者やその家族と出会うこと、その一つ一つを大切な縁と受け止めて、接する人たちを幸せにし、自分自身も成長していってほしいと伝えた。

卒業生という立場ではないが、私にとって初めて経験する大学の卒業式である。卒業する学生は保健医療福祉分野を学び、臨地実習や多職種連携という実践経験も積んで看護師、理学療法士、作業療法士、社会福祉士等として医療機関や福祉施設に勤務する人が多い。チームで仕事をし、患者やその家族など支援を求める人たちと触れ合うことになる。

人とのつながりを大切にしてほしいと願い、「縁尋機妙（えんじんきみょう）」を餞（はなむけ）の言葉とした。良い縁は次の良い縁を尋ね良い縁につながっていく。そういう縁の機能・働きが絶妙である、この上なく素晴らしいという意味である。

私もかつて記念の言葉を頂いたことがある。大学ではなく、小学校の担任の先生からである。作文で賞を取ったお祝いにと、父の知人（行田市の名誉市民）から贈られた広辞苑の裏表紙に書いていただいた。

「広い地球の中で、長い歴史の中で、君という人間は、ただ独り、自分を大切に、自分を生かして」

勉学や仕事で厳しい状況に直面したとき、この言葉はいつも自分の支えになってくれた。受け売りで恐縮だが、この言葉を今年卒業する全ての生徒・学生にお贈りしたい。卒業生の皆さん、自分を大切に、自分を生かして！

（次回は4月6日付）